

萩博物館「史都萩」依頼原稿より

城下町萩のキリシタン

『潜伏キリシタン図譜』プロジェクト・実行委員会

小川 信子

『潜伏キリシタン図譜』プロジェクトとは、2015年『明治日本の産業革命遺産』に引き続き、2018年度ユネスコの世界遺産登録を目指す『長崎と天草地方の潜伏キリシタン遺産』のサポート組織です。プロジェクトでは長崎・天草に限らず、日本各地に残され、しかも伝承者もなく消え入る寸前の潜伏キリシタンの遺物・史料を調査し記録にまとめ、国内だけでなく国外にも広く問うために日・英併記の一冊の図譜に仕上げます。私は、図譜編集委員・東京大学名誉教授五野井隆史先生の下で山口県担当として任に着き、山口県下、宣教時代(1549～1614)、禁教時代・前期(1614～1644)、禁教時代・後期(1644～1873)の各時代から合計8つの遺物・史料を選出しました。その1つが萩博物館所蔵「萩・指月城キリシタン十字架刻印瓦」で、図譜に掲載させて戴きます。この度、萩博物館とのご縁から『史都萩』投稿の名誉に預かっています。なお選出遺物・史料8つの内、4つが萩に現存します。

山口県ではキリシタン(並びに潜伏キリシタン)の端緒を、日本伝道の先駆者フランシスコ・サビエルの来山口により大内時代のキリシタンと関連付けて考えます。しかしそれで城下町萩に現存するキリシタン遺物を語ることは無理と考えます。端緒は毛利家並びに毛利の武士とキリシタン宗の出会いにあると仮定し、キリシタン史料から毛利家並びに毛利の武士との関連記事を抜き出し、一考察を図ります。

(1) キリシタン宗との出会い

キリシタン宗との出会いは、1582年毛利輝元がイエズス会の巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノに自分の領内に神父の派遣要請と山口に教会建設許可を約束した(a)ことに始まる。1582年は激動の年で、2月巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノ発案により伊東マンショなど天正遣欧少年使節が長崎港を出発。6月本能寺の変が勃発し織田信長自刃。秀吉による中国大返し並びに毛利輝元との和睦と続く。1586年準管区長ガスパル・コエリョは小早川隆景を(四国征伐で拝領した)伊予に訪ね、伊予に教会を1つ設立する許可をもらい、隆景は山口にも教会設立許可を出すように輝元への口添えをし、黒田孝高も輝元への口添えをする。1587年九州征伐の最中、下関か大分県中津で黒田孝高の勧めにより輝元の叔父小早川秀包、メルキオル熊谷元直受洗。同年豊臣秀吉によるキリシタン禁教令が発布。1590年か1591年に毛利輝元は、天正遣欧少年使節から帰国し豊臣秀吉謁見のため聚楽第に向かうヴァリニャーノと伊東マンショなど四公子を室港(現・兵庫県たつの市御津町室津)に訪ね、その後、都でも交際し親睦を深め、彼らに尊敬と好意を示す。1593年毛利輝元の禁教緩和により、イエズス会だけでなく下関にいたフランシスコ会ペドロ・バプチスタも何度か山口を来訪。バプチスタは1597年「日本二十六聖人」の一人として長崎西坂で殉教する。1595年朝鮮征伐のつかの間の休息時、大阪の教会では毛利の武士が何人か受洗、その中には毛利輝元が助言を求める身分の高い武士もいた。1596年やはり大阪の教会で毛利の武士で受洗した人にジョアンとパウロ・ヒラカンドノがいるが、H・チース

リック氏は、ジョアンは三輪小次郎、パウロは平賀元相(1617年管区長コーロスは全国信徒代表 752 人の署名を集めたが、京都代表 81 人の 1 人として平賀茂庵はう路と署名)と言及される。1598 年秀吉の死去により朝鮮征伐も終結となる。

パジオの 1598 年 10 月 3 日付書簡によると毛利輝元は再度、宣教師派遣を要請する。それにより 1599 年当時、毛利秀元の所領地であった山口にイエズス会住院を開設。ヴァリニャーノの 1599 年 10 月 10 日付書簡には輝元より下関と広島に住院開設が約束され、1599 年か 1600 年にチェルソ・コンファロニエーリが広島に着任すると記述される。

1600 年関ヶ原の敗戦。1600 年山口の教会は田舎に散在する人を含めて約 500 人の信徒数であった。敗戦の一報が届いたとき毛利輝元が自害したという流言が流れ山口は騒然となる。それにもかかわらず山口の教会は神父ヴァレンティン・カルヴァリョと修道士アントニオ石田により隆盛期を迎える。1600 年徳川家康でさえキリシタン政策に明確な方向を打ち出せない時期であり、輝元禁教緩和の中、山口の信徒の数は増大していった。貴人信徒は熊谷元直のほかには毛利の重臣榎本元吉の弟の一人、宍戸十郎兵衛、児玉与左衛門、佐波善内などを含め 30 人とされる。1603 年毛利輝元は山口の教会を封鎖し、イエズス会士を追放し、キリシタンに棄教を求めるように命じる。それに対しキリシタン武士は熊谷元直を中心として信仰を守るために団結しはじめる。輝元は今から始まる藩づくりのために多数の能力のある家臣を失うことを恐れ、棄教の問題はうやむやにした。1604 年毛利輝元は帰国を許され山口に到着、城下町を萩と指定され萩に移る。

(2) 城下町萩・指月城普請

萩では築城と城下町建設が着工される。藩士は普請方(土木関係)と作事方(建築関係)の管轄に分かれ、一丸となって城工事を奉仕した。築城は 1604 年からはじまり 1608 年に落成。

・五郎太石事件

1605 年益田組と熊谷組による普請方の事件が起こる。益田組は天野組の五郎太石を盗んだ配下を斬首するが天野元信は許さず奉行所に訴える。義父である熊谷元直も事件に加担し、結局益田元祥と熊谷元直の対立となる。重臣同士の紛争のため輝元の決裁に任された。輝元は「非は熊谷・天野にある」として熊谷・天野家に討ち入らせ、家族と熊谷家に居合わせた佐波善内、11 名が誅伐された。この事件は熊谷党誅伐事件とも言われるが、輝元はリーダーを肅清することでキリシタン宗によって結ばれた藩士集団が静まり、早期築城と家臣団の強固な結束が叶うと考えた。しかしこの処遇は、反対に藩士に不安を与えた。

・萩・指月城キリシタン十字架紋刻印瓦

指月城は 1874 年廃城令によって解体されたが、60 年経て故山本博氏により萩城内に散乱した瓦の破片収集が行われた。その中に十字架紋が刻印された瓦が発見された。

発見されたのは①ラテン十字 於城詰丸址 ②ギリシャ十字 於城詰丸址 ③聖アンドレア十字 於城東門址 ④華十字 於南門址 ⑤丸に十字 於南門址である。

瓦細工職人は自分の瓦に刻印を押す。指月城跡瓦には泉州堺の瓦細工人の刻印、安芸から追従の藩公認瓦細工人河本家と阿川家、林家の刻印また黒田藩博多瓦町細工人の雲紋刻

印もみられるが、そのほかに十字架紋刻印瓦もみられる。城の瓦葺きには大量の瓦が必要のために、城の主要な部分は専門の職人の上質な瓦を使い、表から見えない部分は在郷の土を使い、近場の窯で焼成した瓦で補っている。瓦生成は作事方の管轄であったが、瓦は松葉(ヤニのある木)を最後の仕上げで投入し、酸素を少なくして炭化させ、燻せば完成するので、窯場さえあれば上質でないにしても、瓦焼成は可能である。瓦はキリシタン藩士ならば自分が使用するキリシタン十字架家紋を瓦に押印するであろう。

指月城①ラテン十字と同等の瓦は、2002年大分県臼杵市臼杵城跡発掘調査で櫓跡廃棄土坑(ゴミ捨て場)から数点出土している。この瓦は大友義統時代 1588 年から 1615 年頃に彫られ土坑に廃棄された。臼杵城と指月城ラテン十字瓦は同時代、同宗教と考える。瓦出土は毛利藩内にキリシタン藩士が多くいたことを証明する。

(3) 伊東マンショ来萩

1610 年城下町萩に、小倉の教会から伊東マンショが布教のために訪れる。これは九州管区長セルケイラの布教拡大発案による。前年長門・周防には同教会の斎藤アンドレが下見を訪れ、彼が萩に道案内をする。萩には 300 人の信徒がいて、マンショの教理説教を聞いて新たに 70 人が受洗。マンショは信徒の結束を図るため信徒組織(慈悲の信心会)を設立する。信徒は慈悲の所作を約束。その後山口を経て日向・飫肥に向かう。伊東マンショは天正遣欧使節として 1582 年～1590 年西欧を歴訪、帰国後 1591 年に天草コレジオ(神学校)に進学。長崎、マカオでも学び、その後有馬コレジオでラテン語の助教授、1608 年司祭に叙階。最高位の教育を受けた有識者である。マンショ萩来訪の時、輝元は沈黙を貫いた。

結び

ロドリゲス・ジランの 1612 年 3 月 10 日付書簡には 1610 年伊東マンショ来訪時、城下町萩には 300 人の信徒がいたとある。真実ならば多くのキリシタンが存在したことになる。当時の萩は、輝元の居城は完成したものの城下町は建設途中であり、住人は毛利家その藩士と家族、藩士の家臣、城下町建設に携わる職人など、毛利家に関係する人々に制限される。信徒も毛利家関係者と言える。その後 1612 年徳川家康「キリシタン禁止令」、1613 年「伴天連追放令」、1616 年徳川秀忠「キリシタン厳禁令」、1638 年徳川家光「キリシタン禁制強化の法令」などにより城下町萩のキリシタンも潜伏を余儀なくされた。

今回、山口県下キリシタン宗を元にしたマリア観音信仰を明治以後も継続された、いわゆる潜伏キリシタンが何家か判明したが、いずれも毛利家陪臣の子孫であった。

注釈 (a) 1582 年毛利輝元がイエズス会の巡察師アレッサンドロ・ヴァリニャーノに自分の領内に神父の派遣要請と山口に教会建設許可を約束したことに始まる。

↓

約束したにもかかわらず、ヴァリニャーノは四公子を連れて、海外に飛び立つ。

残されたイエズス会は、織田信長を恐れ、敵対する将毛利輝元に宣教師を送ることさえしなかった。宗教よりも政治を取る。その態度に対し毛利輝元は激怒。以後、毛利輝元のことを悪く記述するイエズス会となる。

- 参考文献 (1) キリシタン文化研究シリーズ 17「熊谷豊前守元直」H・チースリク著
山口県史史料編・中世 1 p1074
芸備地方史研究 87 「平賀家のキリシタン」H・チースリク著
- (2) 萩市史 第 1 巻
「熊谷豊前守元直」H・チースリク著
「萩の瓦」山本勉弥著
- (3) 「ローマを見た」結城了悟(ディエゴ・バチエコ)著
「長門周防のキリシタン信徒組織と伊東マンショ神父」小論 高田重孝纏め